

「オネエ所長の調査ファイル」 # 26

山崎浩治

1

「なんで女装してんのよ、アホかおっさん！」

「タメ口はやめなさい！ あたしは目上！ しかも上司よ！」

「チッ」

「舌打ちもしない！」

「自分は仕事中に女装していいのかよ！」

「これは尾行のための変装。シャーロック・ホームズだって変装の名人だったんだから！」

「金沢プライベート・リサーチ」のオネエ所長、市山と病氣療養中のトオルに代わって採用された臨時調査員の沙織が金沢市内の住宅地で張り込み中だ。この日の市山は黒の女優帽とベージュのロングコートでシックに女装している。

今回の依頼人は「主人が浮気している。証拠をつかんでほしい」と相談してきた金沢市に住む弘子(72歳)である。地元の中堅会社で営業部長を務めていた夫の昇(73歳)は60歳で定年退職、その後5年間嘱託として勤務し、8年前から悠々自適の生活を送っている。ところが1年ほど前から弘子の目を盗んで自宅に女を招き、浮気しているというのだ。

「70歳過ぎて浮気だなんて、最近の高齢者は元気だわ。家に女を連れ込むなんて大胆というかなんというか」

運転席の沙織が呆れたように言った時、デイサービスの送迎車が家の前に停まり、介護スタッフに付き添われた弘子が車内に乗り込んでいくのが見えた。送迎車が出発すると、入れ替わりにやってきた軽自動車が停車し、中から中年女性が降りてきた。出迎えた昇が笑顔で対応している。

「彼女が浮気相手ね！」

運転席で思わず身を乗り出し、カメラを構える沙織を市山がやんわり制した。

「軽自動車に介護施設の社名があったでしょ？ あれは週2回やってくるヘルパーさん。1回1時間、掃除や洗濯などの家事をやっていくの」

「なんだ……」

午後になって別の中年女性がやってきた。尾行して身元を確かめたところ、一人娘の祥子(48歳)だった。金沢市内に会社員の夫と3人の子どもたちと暮らしており、週に何度か安否確認がてら実家に顔を出しているのだ。

結局、弘子がデイサービスから帰ってくるまで家を訪れたのはこの2人だけである。ところがその日の夕方、弘子から勝ち誇った声で市山に電話があった。

「言った通り、浮気相手が家に来てたでしょ？」

2

翌日、「金沢プライベート・リサーチ」にやってきた弘子が一気にまくし立てた。

「私が留守にしている間、図々しく家に上がり込んでそうじをしたり、主人に食事を作ったりしてるのよ。厚かましいったらありゃしないわ」

「昨日、お宅にきたのはヘルパーさんと娘の祥子さんだけよ」

市山の言葉に、弘子が嘲笑の表情を浮かべた。

「探偵さんは何も分かっていないのね。それはあの女の変装なのよ」

きっぱりと断言する弘子に、市山が質問した。

「あなたは昨日、デイサービスに行ったよね？」

「そんなところに行っていない。私は昨日、お友達とお食事していたもの」

嘘をついているとはとても思えない確信のある口ぶりだった。それから小一時間ばかり、夫の浮気について熱弁をふるった弘子が事務所を後にした。

「あの依頼人、もしかして認知症なの？」

見送った沙織が口を開くと、市山がうなずいた。

「夫の浮気は彼女の嫉妬妄想だったようね」

「嫉妬妄想？」

「認知症の典型的な症状の一つ。自分に自信がなくなって、配偶者に見捨てられるのではないかと不安から発症するの」

「それで、これからどうするわけ」

「依頼人の夫に事情を話すしかないわ。でも、ちょっと気になることがあるの」

市山と沙織が依頼人の自宅に赴くと、びしっとスーツに着替えた昇がちょうど家から出て来る場所だった。車庫に置いてあるセダンに乗り込み、出発する。顔色を変えた市山が沙織に指示した。

「サオリ、あの車を尾行して！」

尾行を始めてほどなく異変に気付く。昇の車はしばしば対向車線にはみ出す。一方通行の道を逆走する。同じコースを何回も回る。ハンドルを握る沙織が悲鳴のように叫んだ。

「おっさん、ヤバイよ！ あの人は……」

「やっぱり、夫も認知症だったのね」

3

弘子が脳梗塞で倒れたのは69歳の時だ。すぐに病院に搬送して手術、退院後、老健で3カ月のリハビリを経て要支援2まで回復したものの、その1年後、忘れ物や探し物が増えるといった症状が現れ、病院を受診するとアルツハイマー型認知症の初期と診断を受ける。人前に出ると、しゃんとして認知症だと気付かれないが、このころから料理好きだった妻が料理で失敗することが増えていく。「お料理ができない私に愛想が尽きる？ 私を捨てて、ほかに女を作らないでね」と、ことあるごとに言い募った。

娘の祥子は「認知症のお母さんをお父さんと一緒にしておけない。施設に入所させましょう」と言ったけれど、長年連れ添った妻を施設などに入れたくない。以前、施設見学に赴いた際、車

いすに乗った年寄りが童謡を歌っているのを目の当たりにして、こんなところに弘子はもちろん、自分も入ってたまるかと思う。

妻の介護疲れか、近ごろ昇自身、ぼんやりする時間が増えた。朝起きて、会社に行こうと車に乗って家を出るのだが、しばらくすると道に迷ってしまう。周囲を見回しても見慣れない風景で、どこで道を間違えたのか分からない。何年も通いつけた会社への道を忘れることがあるのだろうか。車のナビに会社の住所を入力しようとするが、会社の住所が即座に出てこない。いや、そもそも自分が勤めている会社の名前さえ思い出せないのだ。

最近、不思議そうに昇の顔を見た弘子が「あなた、どなた？」と言い出した。夕方になると「おうちに帰る」とそわそわし、家を出ていこうとする。「おまえの家はここだ」と言っても聞かないので「家まで送る」と近所を一周して帰ってくることもある。夜中、話し声が聞こえて起きてみると、弘子が鏡に向かって話している。鏡に映った自分を誰かとかん違いしているのだ。妻の記憶から少しずつ、昇との生活が抜け落ちていくようだ。

自分もいずれ妻や娘の名前を忘れていくのだろうか、と昇は暗澹とした気持ちになる。いまのところ、妻と娘の名前はしっかり覚えている。けれど顔を思い出そうとすると、浮かんでくるのは新婚間もないころの妻、いつも肩車していた少女のころの娘の顔だった。昇はこのごろ、夢のなかで生きていような気がしてならない。

4

乱暴な運転を続けた昇はしばらくしてコンビニの駐車場で車を停めた。市山が急いで運転席に赴くと、昇が途方に暮れた表情でハンドルを握っていた。

「気分でも悪いの？」

市山の言葉に、昇が茫然と返答した。

「会社に行きたいんだが、道が分からない」

市山がゆっくりとした口調で続けた。

「それはご苦労様。だけど今日は日曜日よ」

「そうか、今日は日曜日なのか……」

「おうちに帰りましょう。あたしたちは奥様の友達。家まで送るわ」

昇を市山の車に乗せて自宅まで送り届けた後、沙織が市山に尋ねた。

「おっさん、あの人が認知症だって分かったの？」

「こないだ張り込みした時、駐車場の車が傷だらけだったから、もしかしてと思ってたの。確信したのは、さっき彼が家から出てきた時。スーツ姿なのに足元はスリッパ、それもトイレ用を履いてたから」

「おっさん、なかなかやるじゃん」沙織が見直したようにつぶやいた。

市山から連絡を受けて父の状態を知った祥子は早速、「認知症で車を運転するのは飲酒運転と同じよ。もう運転はやめなさい」と免許証を自主返納するよう迫った。しかし、本人は認知症の片鱗さえ感じさせない、しっかりとした口調で「私は少し物忘れをするだけで認知症なんかじゃ

ない。これまで無事故無違反で運転には自信がある。母さんを病院に連れていかなきゃいけないし、買い物の足だってなくなる」と強く反発した。

そこで、かかりつけの医師に頼んで「車を運転して人をはねたら取り返しがつきませんよ。それに車より歩いた方が健康的です。足腰が元気なうちは歩きましょう」と説得してもらおうと、ようやく納得して「車にはもう乗らない」と約束した。

ところが昇はしばらくすると約束したこと自体、すっかり忘れてしまうらしく、朝になると「会社へ行く」と車に乗って出掛けるのである。困り果てた祥子が車の鍵を隠す、車を自分の家に持っていくなどして、半ば強制的に運転を止めさせたものの、根本的な解決には至らず、昇の徘徊は続く。

朝スーツに着替えて外出すると、決まって迷子になり、自宅から10キロ以上離れた場所で保護されたこともあった。携帯電話のGPS機能で居場所を探そうとしても、そもそも持たずに外出することが多く役に立たない。一方、妻の弘子も近所のスーパーで万引き事件を起こし、警察の世話になるなど事態は悪化していくばかりだった。

5

娘の祥子はパート仕事や家事、育児があるため、両親を24時間、世話することができない。さまざまな介護サービスを利用するにしても限界があり、夫婦はそれからほどなく、デイサービスと訪問介護を併設するグループホームに入所した。

入所にあたっては昇が抵抗したようだが、顔なじみの職員が多いこともあって弘子が入所を強く希望し、昇も渋々、了承したという。当初、二人は夫婦用居室に入所する予定だったが、「知らない人と一緒に部屋は嫌」と弘子が言い出し、夫婦は現在、別室で生活している。

「認知症の症状が進んで共同生活が難しくなると、退去を命じられるかもしれないので、認知症対応の老人ホームも探している」

数カ月後、祥子から報告を受けた市山が沙織を伴い、民家を改装したグループホームに赴くと、夫婦は日当たりのいい庭で日向ぼっこをしながら会話を交わしていた。

「あなたのお名前は？」

「昇」

「素敵なお名前ね」

「私と交際してくれないか。あなたのことが好きなんだ」

「ごめんなさい。私、もう好きな人がいるのよ。でも、あなたのことも好きよ」

うれしそうに弘子が微笑む。その無邪気な笑顔は少女そのものだった。そんな夫婦の姿を離れた場所から眺めながら、市山が言った。

「認知症の人の心は、その人が一番輝いていた時代に戻るの。二人はまるで恋人時代に戻ったみたい。そう思えば認知症も悪いことばかりじゃなさそうね」

「おっさん、顔に似合わずロマンチックなこと言うじゃない」

「サオリの口の悪いところは誰に似たのかしら」

「親の顔が見たい、と言うなら鏡で自分の顔を見れば？」

無愛想に返答した沙織は、市山の実の娘なのだった。